

学 位 論 文 審 査 の 要 旨

論文提出者	久保 朱里		
論文審査委員	(主 査)	朝日大学歯学部教授	澁谷 俊昭
	(副 査)	朝日大学歯学部教授	近藤 信夫
	(副 査)	朝日大学歯学部教授	村上 幸孝
論文題目			
<i>Porphyromonas gingivalis</i> 腹腔内投与がマウス脾細胞の免疫能に与える影響			
論文審査の要旨			
<p>歯周病は種々の全身疾患と疫学的に関連することが注目されている。しかし、歯周病が全身免疫能に影響し、そして関連疾患の発症に及ぼす機構はまだ十分には明らかにされていない。</p> <p>本論文では <i>Porphyromonas gingivalis</i> (<i>P. g</i>) の菌体がマウス脾細胞の免疫能に及ぼす影響を免疫系の中枢を担う T 細胞について検討している。</p> <p>線毛を有する <i>P. g</i> ATCC 33277 株 (<i>P. g</i> 33277) および莢膜を有する <i>P. g</i> W83 株 (<i>P. g</i> W83) を熱処理して、それぞれ C57BL/6J 系統マウスに腹腔内投与し、経時的に脾単核球を単離した。脾単核球中の T リンパ球の構成を、フローサイトメトリー法により測定し、培養上清中に産生されたインターフェロンガンマ (IFN-γ) を酵素結合免疫吸着法により定量した。</p> <p>その結果、<i>P. g</i> 33277 投与群においてのみ、NKT 細胞の割合が有意に減少していた。また、<i>P. g</i> 33277 投与群の IFN-γ 産生能は、投与 6 週間後でも有意に低値のままであった。IFN-γ 産生能低下は、脾細胞の免疫能が低下している意味し、<i>P. g</i> 33277 投与による脾細胞の免疫能の低下は、NKT 細胞の減少と関連する可能性が考えられ、それには特有の成分が関与することが示唆された。また今回の結果から、<i>P. g</i> の 系統の違いが全身免疫能に様々な影響を及ぼし、関連する疾患への関与も異なる可能性を示している。</p> <p>審査委員は、本論文によって脾細胞の免疫能を検討することで歯周病原性細菌の影響を明らかにする手法が確立されたことは独創的かつ画期的であり、この分野における新たな知見を提供したことや、さらに他の細菌で同様の検討も期待できることから、多くの歯周医学研究の発展の礎になると判断し、博士(歯学)の学位を授与するに値するものと判定した。</p>			